



仁丹町名看板をたずねて 早春の洛中をゆく。

◎案内役／藤田眞作さん

大正から昭和にかけ、数多く設置された仁丹マーク入りの町名看板。今なおその名残をとどめる古都をそぞろ歩けば、はるか昔に遡るような、不思議な感覚に包まれます。底冷えの季節が過ぎ、春の気配が漂い始めた大路小路を藤田眞作さんにご案内していただきました。



①高倉通松原下ル西入福田寺町の町名看板

はるか時代の面影を
路地に残す。

「今回は、烏丸通よりも東側のエリアを歩いてみましょう」。藤田さんの提案にしたがって、まずは万寿寺通を東へと向かうことに。オフィスビルが建ち並ぶ大通りから一歩離れると、辺りは古くからの民家が静かに軒を連ねています。さらに藤田さんは狭い路地へ。後に付いていくと、ちよつと変わった仁丹看板に出会いました。材質は木製。表示を見ると「高倉通松原下ル西入福田寺町」とあり、町名が大きく表示されているのがわかります。町名よりも通り名を大きく扱うホウロウ製とはまた違った印象です。「木製の看板は、数少ない貴重なものです」と藤田さん。かすれた文字にも、その歴史がうかがえます。

町並みの風情を味わいながら歩いていると、今度は何やら怪しげな入り口を発見。一見普通の民家のような門をくぐって進んだ先には、地域の氏神である命婦稲荷社とともに、古びた井戸が祀られています。「鉄輪ノ井」と呼ばれる井戸には伝説があり、この水を飲ませた相手とは悪縁が切れると

町名表示にあらわれる
京都人気質。

か。謡曲「鉄輪」の題材にもなり、水が涸れた今では隠れた観光スポットなのです。

万寿寺通と富小路通が交差する四つ辻には、ふたつの町名看板が。北西にある看板は「富小路通萬壽寺上ル本上神明町」、南東側は「萬壽寺通富小路東入本神明町」という表示になっています。「碁盤の目状になった京都の町は、南北と東西の通りの名



②命婦稲荷社



③鉄輪ノ井の入口



●藤田 眞作(ふじた しんさく)

1944(昭和19)年北九州市生まれ。京都大学工学部の学生・助手時代を京都で暮らす。富士写真フイルム(株)足柄研究所勤務の後、京都工芸繊維大学教授。研究教育のかたわら、和菓子求めて京都市内をウォーキングするうちに仁丹の町名看板に興味をもつ。現在は、湘南情報数理化研究所(<http://xymtex.com>)を主宰。



⑥ 明王院不動寺

⑤ 萬壽寺通富小路東入
本神明町の町名看板



④ 富小路通萬壽寺上ル
本上神明町の町名看板



仁丹マーク入りの
町名看板所在地

称を組み合わせ場所をあらわします。この時、「通」をつけた道筋に該当の場所があることに。また、「通」をつけた通りを、東西・南北にかかわらず先に書くのです。なるほど、よく似た地名であっても正しい位置を把握できるように考えられた表示方法。「上ルは北へ、下ルは南へ。入ルで東西の方向を示します」。藤田さんの説明に、合理的といわれる京都人の一面を垣間見た思いです。

町の佇まいに 古都の奥深さを感じて。

次に向かったのは、松原通麩屋町角にある「明王院不動寺」。五色の垂れ幕がなければ行き過ぎてしまうような構えながら、この寺の開基は今から1300年以上も昔とか。

「桓武天皇が平安京守護のため、経典をおさめた」とされる四盤座のうちの南岩倉と今に伝えられています。細い通りに区切られた町中に、壮大な歴史がひっそりと溶け込んでいるのが、京都の奥深さといえます。

さらに、町歩きに感動を添えるのは、京都ならではのモノとの出会いです。ふと目にとまった京町家。木の引き戸を開けると、そこには手づくりの温もりにあふれた個性派バッグが。一方、現代建築のモダンな外觀のショップには、伝統を誇る漆器の数々が並んでいました。古きよきものと新しさをみごとに融合させる千年の都。仁丹の町名看板が昔の姿をとどめている理由は、こんなところにもあるようです。



⑧ 漆器の井助
漆器の専門店として180余年の歴史を持つ井助商店。文政年間の創業以来、漆の精製・販売を手がけるとともに、伝統工芸としての漆の美しさや新しいスタイルの漆器の楽しみ方を提案している。
TEL/075-361-5281



⑦ YOUKO KABAN
築100年という町家の風情を活かした店内には、オーナーの小林洋子さんが心を込めてつくるオリジナルバッグが所狭しと並び。好みに応じたデザインやサイズなど、オーダーメイドでの製作も可能。
TEL/075-351-1755